組合だより

第４０号
９月３０日
２００２年

発行所
岡山大学職員組合
〒 700-8530　岡山市津島中 2-1-1
電　　話　086-252-1111（代）
（内線）7168
直通・ＦＡＸ　086-252-4148

岡山大学職員組合ホームページ　http://hb4.seikyou.ne.jp./home/ODUnion/　メールアドレス　ODUnion@mb4.seikyou.ne.jp

教研集会大成功

全大教教研集会が、９月６日～８日、岡山大学で開催され無事成功裡に終わりました。６日の開会集会には河野学長にも来賓としてご挨拶いただきました（後日詳報予定）。全国６７大学・高専から２５５名（うち岡大５８名）の参加のもと、法人化に対してどう反対しかつ対応していくのか、報告の概要をかいつまんで報告します。

法人化と大学の自治

「旧文部省と旧科技庁の官僚との対立、そして遠山文科大臣と尾身科技担当相の立場」（東職）といった問題は、当面の法人化問題にさまざまな問題を生んでいるものと思われます。そして、「その狭間で大学の自治が問われている」（同）ことも間違いありません。そしてそうした官僚間の争いやトップダウン的行政の予想される失敗が、現場の研究者や大学側に転化されそうなことも、目に見えています。

にもかかわらず、私たちは、「今後いかなる設置形態になろうとも、真理探究の場として研究教育を行うことを基本使命とする」（名大職）のであり、そのための管理運営などは各大学の「特色・個性」が十分生かされなければならないし、社会に開かれた大学ということは、大学の自治を侵す「介入」を認めることではありません。こうした趣旨の名大職組の視点こそ、さらに具体的に深められていくべきものです。

大学憲章作り

「最終報告」に無批判な制度設計が現場の教職員を窒息させる「地獄絵」であることを指摘するのは、山口大職組です。同職組の大学「憲章制定には学長の同意を得ました」という報告は、とても興味深く、頼もしい報告です。岡大職組の憲章作りの際の「基本的考慮事項」も注目に値します。憲章作りの中でいかなる形態のもとでも「真理探究の場として研究教育を行う」という視点からの新しい大学像が提示される必要があります。

評価をめぐって

岡大では、すでに個人評価が試行されていますが、客観的・合理的で統一的な評価が可能だろうかという点や、給与や処遇へ繁栄されて差別化がなされるのではないか、といった危惧や、評価を行う上での膨大な作業とそれに見合う効果についての疑問などが報告されました（岡大職組）。「無責任な井戸端レベルの評価」（北海道教育岩見沢校職）が教育機関をスポイルするおそれも指摘されています。

教員養成系大学問題

ご承知のように教員養成課程の入学定員は、９８年以来５千人が削減され、関連大学は厳しい状況に置かれています。独法化をにらみながらどのように対応したらいいか苦渋の模索が続けられているようです（静大職、岡大職）。山形大は、０２年５月「担当校断念」にまで至ったのですが、知事、県議会を始め、関係労組などの運動や１５００人の県民集会など現在も存続を求める運動が続いているということです（山形大職）。

学生ボランティアの森林活動

多くの報告が独法化がらみのものでしたが、何本かの報告は、教育研究実践についての報告でした。中でもほぼ壊滅状態になっていた森林を生き返らせた隠岐島の「森の助っ人」活動の報告（島根大職）は興味深いものでした。農学（花卉栽培）を通して地域と連携した報告（岡大職）や「英語を勉強するおもしろさ」を伝える授業をするべきだとする報告（岡大職）も注目されます。

組合活動の今後

大学の根底が揺り動かされている現在、大学職組の果たすべき課題は、非常に大きいと思われます。「法人化問題の中で教職員の身分・賃金・労働条件が危機にさらされようとしている今こそ」組合の重要性を訴えたい（東職）という報告、「交渉力量ある過半数組合」を目指す（岡大職）という報告等は、今回教研集会共通の結論と言えるでしょう。

座標軸

重い歴史の扉が開かれた。日朝共同宣言と両国の国交正常化交渉の再開である。敗戦時から数えて、半世紀以上、日本の朝鮮占領から数えるならば、実に１世紀近く、日本と朝鮮との関係は、「不幸な関係」であった。その関係を正常な関係に戻すための糸口がようやくにして開かれたのである▼私は小泉総理に対しては、批判的見解をもっている。しかし、先のハンセン病訴訟と今回の日朝関係に関わる総理に決断については、私は敬意を表する。この両件は、その他の悪政にもかかわらず歴史に残る偉大な功績だと思う▼むろん、この決断に関して、さまざまな批判や意見があることを、私も知っている。私自身としても、注文のつけたい点がないわけではないが、この状況、このタイミングを考えるならば、一歩の前進を追求しようとする限り、それ以外の選択があり得たか、私は疑わしいと思う▼ただ、それにしても拉致された人々の痛ましい結末である。さまざまな観測も飛び交っているけれども、たとえば、わずか１３歳だった少女が突然体験した恐怖と絶望、孤独と望郷の思いだけは、動かしようのない重い真実である。また、その父母の味わった苦悩も想像にあまりある。再会だけが、その苦悶を幾ばくかは晴らしてくれるだろうと期待していただけに、この悲報にすべての人が胸の潰れる思いをしたに違いない▼この胸の潰れる思いが、さまざまな議論を呼び起こす。私も、あれこれの発言の誘惑に駆られる。国家犯罪とそれを見過ごし続けてきた国家責任などなど▼しかし今はそれらの言説には一切口をつぐんで、一つだけ指摘したい。１９３９年以来１５０万余人の朝鮮人が「奴隷狩り」的に日本に強制連行された事実である。今私たちが体験している胸の潰れる思いをかつてかの国の人はどれほどの規模で味わったことであろうか▼『流れる星は生きている』（藤原てい）は、そうした苦痛を押しつけた日本人が引き揚げ者として苦しんでいるとき大きな真っ白なおにぎりを「パンモグラ！」と差し出してくれた朝鮮の人の話を伝えている▼争いと報復でなく、和解と赦しあいとを、私は、この胸の潰れる思いから紡ぎ出したいと切望する。

（い）

盛り上がる交流集会

拍手喝采の歓迎合唱 広がる交流深まる親睦

親睦会 ―情報交換や励まし合い―

教研集会二日目、7時間を超す長い研修会が終わった後、午後6時から、会場をマスカットユニオンに移して、懇親会を開きました。参加者は、160人。岡山大学26人。

加藤鎌司実行委員長の挨拶、全大教委員長糟谷氏の発声で乾杯です。疲れた喉にしみ通るようなビールの味。充実した7時間の疲れが消し飛ぶ一瞬です。

まず岡大職組10名の合唱団が、加藤晴子先生のかろやかな指揮にあわせて、「聖者が町にやって来る」「エーデルワイス」「さとうきび畑」「イマジン」をみごとなハーモニーで唄い上げ参加者を魅了（？）しました（左と下の写真参照）。また、加藤先生のソプラノ独唱には疑いもなく皆さん魅了され、先生にはアンコールにも応えていただき、参加者一同大喜びでした。

続いて各地区ブロックごとに、それぞれ個性的なスピーチや自己紹介、また、これはいつの時代の歌かと思われる出し物など、本当に楽しい交流会となりました。

分科会のひとこま

合唱団生みの親－蝶ネクタイの中富書記長

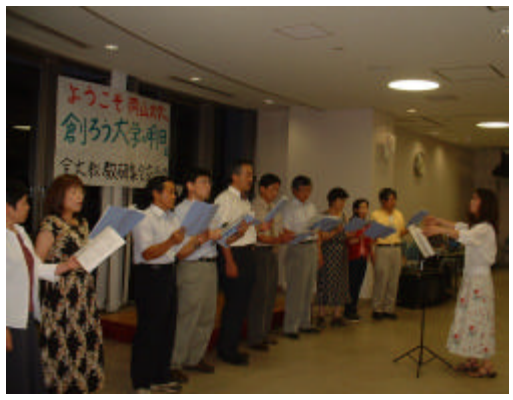
また、そんな交流の中でどの組合も同じような共通の悩みを抱えていることがわかってきます。

明治維新、敗戦の期に行われた学制改革に匹敵する大改革が、目下進行中です。時代の激しい潮流がもろに私たちを襲ってきます。

この時代をどう生き抜くか、それが私たちに科せられた試練です

手を取り合って、がんばり抜こう―そうお互いに励まし合い、決意を固くしつつこの夜の親睦会は幕を閉じました。

参加者の皆さん、会場設営の皆さん、本当に本当にご苦労さんでした。



加藤先生の指揮のもと、みごとに了明日者を魅「明加参とくには、参加者もハーモニーで、参加者なたが岡大職組合唱団。るさ」の替え歌も唱和して、大合唱になりました。

練習の成果あり ―替え歌にやんやの喝采―

すでにお伝えしたように、組合では、お昼休みを利用して、この日のために、それでなくても美しい喉に磨きをかけてきました。

加藤先生のご指導のお陰や、参加者の熱意の甲斐あって、私たちのコーラスも人様のお耳に入れることが出来るレベルに達したと密かに信じていました。

とはいえ、実のところは、大勢の人を前にして、日頃の成果が出せるものかと、内心ヒヤヒヤでした。

でも、案ずるより産むが易いというでしょう。

声を一度出してしまえばもう大丈夫、後は自然に流れていきます。苦心したハーモニーも見事にクリア。

そこで繰り出したのが、必殺技。岡大職組の秘密兵器です。

近頃みんな忙しい
個人評価や任期制
歌ってこそ
歌ってこそ
ひらめく新発明
あしたがある
あしたがある
　あしたがあるさ
　（3番）

この歌詞を、「明日があるさ」のメロディで歌うのです。もう抱腹絶倒、拍手喝采。会場の参加者の大合唱になりました。

散歩道

朝の散歩道は、ちょっとした社交の場である。軽く会釈する人、元気におはようございますという人、いろいろである。

お供の犬も、顔見知りには、まじまじと瞳を向け、尾を振る。主人の方が無愛想でも、犬の方が、愛嬌を振りまく。

ぼく？わたし？お名前は？と犬に話しかけることで、人間の方との会話が始まることもまれではない。

可愛いですね、といえば、どんな苦虫つぶしでも、ほおを崩す。そんな風にして、ひとしきりペット談義に花が咲く。

夏休みになると、散歩道に新しい登場人物が現れる。ラジオ体操に通う子供たちだ。首に出席のはんこをもらうカードをぶら下げて、三々五々体操会場への道を急いでいる。

すれ違うとき、いくらかはにかんで、「おはようございます」という。「時間、大丈夫？」と声をかけると、にっと微笑んで、走り出す。

駈けて行く
子らの行く手に
ラジオ鳴る

（k）